特約店限定特典

甘い朝

窓から、眩しい朝の光が差し込んでいる。

（ん……）

フィリアが目覚めると、メイナードの綺麗な顔がすぐ側にあった。彼の宝石のような瞳と目が合って、フィリアはかあっと顔を赤らめる。

「メイナード、様!?」

「おはよう、フィリア」

どうやら少し前から起きていた様子の彼は、フィリアを見つめて優しく微笑んだ。

「よく眠れたかい？」

「……はい、メイナード様」

気付けば、メイナードの温かな腕がフィリアの頭の下にあった。

（ずっと、腕枕をしてくださっていたのね……！）

はっとしてフィリアが頭を持ち上げる。

「すみません、重くありませんでしたか？」

「いや、ちっとも。むしろ、フィリアの体温を感じて嬉しかったよ」

「……っ！」

メイナードの顔に浮かぶ甘い笑みに、フィリアの頬にはさらに熱が集まった。恥ずかしさに両手で顔を覆ったフィリアの耳元で、メイナードが優しく囁く。

「顔を隠さないで、フィリア。君の可愛い顔が見たいから」

そろそろとフィリアが手を下ろすと、メイナードは彼女の額にキスをした。

「一日の始めから、こうして君と一緒に過ごせるなんて。何て幸せなんだろう」

しみじみとそう言って、そのままフィリアの身体を柔らかく抱き締める。

フィリアも、そっとメイナードの身体を抱き締め返した。

「私も同じ気持ちです、メイナード様」

呪いが解けたメイナードの身体はすっかり回復して、今では細身ながらも引き締まり、頼もしい体躯をしている。

かつて英雄と言われた、手の届かない存在だった彼がこんなに近くにいることが、フィリアは今でも信じられないような気持ちになることがある。

結婚してから一緒に過ごす時間を重ねるほど、フィリアはメイナードのことがどんどん好きになっていった。

そして、それはどうやらメイナードも同じらしい。

姉の婚約者だった時と今とで違うのは、メイナードが愛情溢れる甘い言葉や表情を、真っ直ぐにフィリアに向けてくれることだった。

（このまま、ベッドから出たくなくなってしまいそうだわ）

心地よいメイナードの体温に包まれて、彼の胸に顔を埋めたフィリアだったけれど、再び目を閉じそうになるのを我慢した。そろそろ起きて、研究所に向かう準備をしなければならない。

顔を上げたフィリアに、メイナードが名残惜しそうに言う。

「……そろそろ起きようか？」

「はい――!?」

身体を起こそうとしたフィリアを、何を思ったか、メイナードはひょいと横向きに抱き上げ、そのまま、フィリアを鏡台の前にある椅子まで連れていった。

力強い彼の腕を感じて、フィリアは思わず心の中で呟く。

（呪われていた時は、立ち上がって歩くことすらままならなかったメイナード様が、こうして私を軽々と運んでくださるなんて）

感慨深げなフィリアを椅子に座らせたメイナードが、櫛を手に取る。そして、彼女の長い髪の毛にそっと触れた。

「今朝は、僕にフィリアの髪を梳かせてもらってもいいかい？」

フィリアが慌ててメイナードを見上げる。

「そんなことまで、メイナード様にしていただくのは……」

「君の髪に、僕が触れたいんだ」

フィリアの長い蜂蜜色の髪を、メイナードがさらりと持ち上げる。フィリアははにかむように彼を見つめた。

「では、お願いします、メイナード様」

滑らかな蜂蜜色の髪を、メイナードは肩へと流し、櫛を丁寧に通していく。

「柔らかくて艶やかで、綺麗な髪だね」

耳元でメイナードが囁く声に、フィリアはくすぐったいような思いがした。

フィリアの髪を整えたメイナードは、最後に、彼女の前髪に金の髪留めを着けた。以前に彼がフィリアに贈ったものだ。

髪留めにあしらわれたエメラルドが、朝陽を受けてきらきらと輝いている。

鏡越しにメイナードを見つめて、フィリアは嬉しそうに笑った。

「朝から髪を整えてくださるなんて、ありがとうございました。今日はいい日になりそうです」

「それは僕の台詞だよ」

鏡の中で、二人の視線が合う。すぐ側にいるメイナードの瞳が、優しく輝いていた。振り返ったフィリアと、メイナードの唇がゆっくりと重なる。

何気ない朝の甘い時間が、フィリアにはとても幸せに感じた。

© 瑪々子／風濤社 NOT FOR SALE